

全 仏

NO. 207

5 / 50



若葉に思う

目に青葉

山ほととぎす初鰯

新緑の候である。しかし、私は青葉をみるたびに、鑑真和上をあらためて尊崇せずにはおれない。和上は周知のごとく、はるばる中国から仏戒を日本に伝えてくれた大恩人である。

和上は、航海に失敗すること五度、十一年の歳月をついやして、ようやく日本についたときは、たび重なる遭難と過労のために失明していた。

「若葉して おん眼の帯ぬぐわばや(芭蕉)」に息のつまる思いがする。法のためには、喪身失命を辞せざる底の大願心の乏しい自分を恥かしく思う。私は、何をもって自分の心の汚れを拭うたらよいのであろうか。

(T・M)

写真は平和を願う東南アの仏たち
(ビルマ仏教会から全仏に贈られた
仏像) 17ページの記事参照

人類の不安にみ仏の光を

全仏兵 庫大会 スローガンきままる

本年十月一日、二日におこなわれる第

二十三回全国日本仏教徒会議兵庫大会の
スローガンが「人類の不安にみ仏の光
を」と決定した。この決定にもとづき全
仏や地元の兵庫県仏ではより一層準備に
熱がこもってきている。

兵庫県仏大会準備企画部のスローガン

についてコメントをいただいた。

「人類の危機を救おう仏教で」の全仏
のスローガンと「人類の不安にみ仏の光
を」の兵庫大会のスローガンは表裏の同
意語と御解釈をいただきたい。

ただ肩をはらないで、人間とは何だろ
うか、人間の危機と不安はどこからくる

い「いのちを守る」運動を現在の日本に
もとめてゆきたい。

昏迷の時こそ仏教興隆のとき、今こそ
慈光を仰ぎたい。そして僧俗ともに仏教
徒靈章を身につけたい。そこに慈光溢れ
る真の平和を見出すことができよう。

のだろうか、
不安に対し、
それを乗り切
る安心はどこ
に求めたいの
いか。まや
かしのもので
ない絶対のも
のを求めて人
類が肩よせあ

第二回 日本仏教文化会議

八月下旬、箱根でひらく

ある。

全日本仏教会と国際仏教交流センター
の共催で行っている「日本仏教文化会
議」を今年も開催することが決定した。

講師は渡辺慶大教授

と勝又大正大学教授

今年には昨年引き続き「人類の未来と
仏教」のテーマで、第二回目である。

基調講演の講師及び話題は次の通りで

- (A)「人類に未来はあるか」(仮題)
慶応大学教授 渡辺 格氏
- (B)「人類の未来とその救済」(仮題)
大正大学教授 勝又俊教授氏

開催日時は昭和五十年八月二十五日
(月)、二十六日(火)の二泊二日の研
修で場所は箱根湖尻「湖尻富士見荘」ホ
テルである。

昨年は台風に見舞われながらも基調講

26日にWFB理事会

桜井全仏事務総長を派遣

延期された第十一回世界仏教徒会議

演の講師小松左京先生、金岡秀友先生を
始め参会者の諸先生方は熱心に討議を行
なった。その成果である紀要は現在国際
仏教交流センターで制作中で近々に出来
あがる予定。

なお、今年の「日本仏教文化会議」に
ついて詳細を運営委員会を開いて決定し
ていくが(関東側四月二十一日、関西側
四月二十八日)、聴講を望む方は今から
予定されておくとよいと思う。

教化担当者会議

兵庫大会とも関連、ご参加を

来月6日京都で開催

(WFB)総会について討議するため、
きたる五月二十六日にバンコックのWFB
本部で開かれる理事会に、全仏では桜
井事務総長、石川国際書記の二名を派遣
することになった。

桜井総長らは理事会の前日におこなわ
れる今年のウェサカ祭の各国の比丘に對
する施食供養にも招かれているため、五
月二十四日出発する。

第四回各宗
派教化担当者
会議はすでに
お知らせした
ように来る六
月九日(月)
に京都本能寺
会館にて、講
師松野純孝先
生(文化庁宗
務課・鶴見大
学教授)をお
招きして「仏
教以外の他宗

教の伝道方法について」という課題で基
調講演をお願いし、その後それを軸にし
て各宗の教化担当者の方々討議を重ね
ていただくことに決定した。

各宗派教化担当者の方々熱意ある参
加を望んでいる。

なおこの会議は十月に行なわれる全日
本仏教徒会議(兵庫県仏・全日本仏教会
主催)に関係をもって今年には行われる。

国際婦人年に寄せて

女性と業について

雲井 昭善

このテーマを編集部から寄せられたとき、先ず頭にかんざし、業は人間のすべてに関わる問題でありながら何故、特に女性ととりあげられるのだろうかという問いであった。果たして業は、本来どのような意味をもつのだろうか。ここでは業は概念を分析する中で、女性と業との関わり

が如何なる意味内容をもつかを考えてみたい。それによってこのテーマの今日的な視点となることをさぐってみたい。

業ということば、サンスクリット語のカルマン（一般には中性単数主格形のカルマ、パリー語のカンマが定着している）は、クリ（なす・作る）という動詞から派生し、本来は行為・作用・ふるまい・動作を意味する語である。したがってインド哲学においても(1)取・捨・屈・伸・行進という人間の動作と考えたり、(2)儀式作法の所作、特にインド古代におけるバラモン教の祭式作法や、仏教における受戒作法なり一般の儀式作法を業（カルマ）と称した。更には(3)業とを物質と理解する宗教や思想もあった。しかし今日、一般に業を語る場合は(4)因果応

報という考え方もしくは宿業（しゅくごう）という考え方が中心をなしている。女性と業というテーマについても、常識的には(4)の概念規定と密接に関係している点も否定できない。そこで先ず、この(4)についても少しコメントしよう。

これは、人間がなした善・悪の行為（一業）は必ずその果報を受けるといふ、いわゆる因果関係と結びついて業を扱う立場である。この業論は、仏教がインドに興起した前六・五世紀ころ以前からインド民族意識の土壌で醸成され、いわゆる輪廻転生の思想と密着した。しかも因果応報思想を成り立たせるために、一たんなした行為は潜在力（業力）となつて人間の心に蓄積され、その業力が次生の果報を招くという業報思想へと発展したのである。こうした思索が、逆に現在の果は過去の行為がそうあらしめたのだという考えを引起し、業の問題は、現在のすべてを過去へ遡らせて一種の宿命論的業観を生み出した。かくて業即宿命論とする誤つた業論を屈折させた。では女性と業という場合、上掲の概念規定の中で何が問われていたであろうか。

先ず、業報思想の基調となる善・悪の行為が問われる場合、それは倫理的要因

となることは確かである。仏教を含めてインド思想は、倫理性と宗教性とは不可分の関係にあったから、業報思想は仏教において重要な位置づけをもつようになつた。仏教で行為を言う場合、身・口・意の三業（動作・言語・意志）とし、特に意業を重視する。心に思つたことが言語や動作にあらわれるからである。「諸悪莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸仏教」（『法句経』一八三偈参照）が、そのすべてを語っている。しかも一般に善い行為は目立たないが、反対に悪い行為は社会的にも目立って扱われる。

いま釈尊在世時の仏教教団の在り方から言えば、比丘（出家修行僧）教団が主であつて女性の出家はなかなか許されなかつた。比丘たちの修行にとつて女性の出家は障りとなる。というのがその基本的理由である。しかも伝統的に男性優位のインド的風土にあつては女性をさげすむ傾向を助長し、そこから業一煩惱、業一つみ（罪業）という意識が女性と業の問題を更に屈折させた点は否定できない。八女性は業が深い、という発想はここに起因するようである。女性に関する三從五障説が仏典に登場したのは、『マヌ法典』というインド的伝承があるとしても、まさしく、過去における女性の社会的地位が生んだ副産物である。もっとも、母系制尊重の社会では別のデータがえられるが……。

ところで私は、女性と業というテーマで今更八女性は業が深い、という如きそらおそろしい見解を、無批判に採用しよ

うとするのではない。特にわが国では平安朝以来、業をベシミスティックに扱う傾向があるが、私がこのテーマで強調したい点は、むしろ八業は行為である、という業概念(1)の原点に立ちかえつての見解である。業は行為である限り、われわれ一人一人の人間形成と密接にかかわる。それは今の、そして明日のわたくしたちの人間形成へのエネルギーである。従来、業を個人の業（仏教術語では不共業一ふうごう）として一般的に扱われていたが、業は反面、連帯性・社会性をもつ（共業）ものである点を強調したい。それはいかなる論拠に俟つのであるうか。

業は生み出す力、エネルギーであるとする理解は、決して思いつきでも無根拠でもない。ヒンドウ教において重要な意味をもつシャクティ（力・性力）の思想はインド哲学思想にもその類似性が見られる。女神もしくは女性名詞で代用される原理は、あらゆるものをクリエイトする原動力とみなされ、人間形成ばかりか、現象・社会と密接に関わつていた。これに対して仏教の女性観は、一切衆生悉く有仏性を建て前としながらも女人成仏についてためらいをもたせ、変成男子という如き発想が支配的である。八女性は業が深い、ということもここに關係している。

今日のわが国において、女性が関わりあう底辺は極めて広い。家庭生活、子女の教育からはじまって社会との接触度はかつての比ではない。こうした状況の中

で女性と業の問題を考える場合、およそ二つの在り方が思考される。一つはみずからの人間形成、もとより男女を問わないうとしても家庭をあずかる女性にとつての人間形成は、即子女の人間形成へと連なるという自覚である。それはとりもなおさず、業は自分一人だけのもの（不共業）とする縦の線から、横への無限のひろがり（共業）をもつことを意味している。他の一つは、業は行業である以上、ペンシスティックなしかもネガティブな発想でなくて、ポジティブな、すなわち今日から明日へ、未来へのはるかなる展望の中で、みずからの人間性を開発し、

無限の可能性を秘めたエネルギーを開発することであろう。それは基本的には自己自身の開発でもある。このように考えるとき、業の問題はわれわれに新しい視点を提供する。仏教において、一般的には業因・業縁、業障・宿業の問題が業論の主流を形成しているかの印象を与えるが、帰するところは人間存在の自覚にある。この自覚を基点として人間形成を考えるとき、そこには男女の区別はないと言わねばならない。（大谷大学教授・文博・日本学術会議 会員）

仏青の全国組織確立の悲願

全日仏青理事長 増田貞圓

☆「新生」全日仏青の結成
昨年十一月六日、京都知恩院における第二十二回全日本仏教徒会議で、「新生」全日本仏教青年会が結成されました。

この意図するところは、従来の「全日仏青」を改組して、新しいメンバーによる名実共に備わった強力な仏青の全国組織をつくりあげよう、というものであります。その席上、結成の準備を推し進めてきた関係で、もうひと苦勞しなさいということ私が理事長に選出されたのですが、内心、これでは人事が一新されない懸念しつつ、ある種の責任を感じ

て、理事長就任を受諾いたしました。ある種の責任とは、自分が火をつけたことだから、基礎が固まるまで、扶養家族五人、年齢四十二歳のどこからみても青年とはいえない自分だが、できるだけのことはしなければならぬ、と思つたからであります。

☆宗我を超えること

仏青の全国組織を作ろうという願いは随分以前からあり、過去、何回となく、先輩諸師によって試みられたようですが残念ながら継続発展し、その結果をみるに至らなかつたようであります。

結果をみながつた大きな原因の一つは宗我ともいふべき宗派意識が、若者でありながらも、ともすれば前面に打ち出されて和合を欠く結果になつたと聞き及びます。殊に、大宗派といわれる教団に属する仏青代表者によって招来せられたということが、悲しむべきことだと私は思ひます。

私自身、真宗大谷派という、決して小さい教団とはいえない宗派に属する一人として痛みを憶えるものであります。変革のエネルギーを持つ筈の青年すら究極のところ宗派意識にとらわれて、遂にそれを超えることができずに、大同団結の実をあげることができなかったことを、実に残念に思ひます。

全一仏教運動における仏青運動の歴史は、文字通り離合集散の歴史であつたといつても、過言ではありません。

☆一県一仏青の結成を

私達は、こうした過去の教訓を生かし余程の覚悟をもって、全国組織結成の作業を推し進めていかねばならないと思つています。

「われらは、宗派、地域、学校等、それぞれ独自の性を尊重しつつ、自尊の心を心とすることにより、それらを超え、互いに協力と合を保ちつつ、社会の発展に寄与する」

昨年の知恩院大会において、私達は、このような確信をいたしております。

一 仏教徒として、自己の研鑽に励みつつも、単なる傍観者や、自恵に墮することなく、社会的諸問題に対しても、主体

バングラティシユの孫児に愛の手を!!

バングラティシユは、印パ戦争の影響や、モンスーンなどの天災によって、大きな被害をうけ、おびたしい難民に混じつて、幾多の孤児が飢えと病いに苦しんでおります。

ダッカに在る「仏教孤児院」には目下四百名に上る孤児が収容され、仏教教育をうけりハピリテションを通じて、社会復帰に努力しておりますが、日常の食糧、衣類、薬品にいまなお相当の欠乏を見ております。同じ仏教徒として彼等の窮状を黙視し得ない現状であります。

何卒これら幾多の孤児救済のために、皆様の善意を伝達いたしたく、救援資金の募集をいたしておりますので、御協力下さるよう伏してお願ひ申し上げます。

一、目的
バングラティシユ国ダッカ市在、アカラタナ仏教孤児院に対する救

一、送金
先き 一五二五(財)全日本
教会国際局

一、締切
五月末日迄

一、主催
(財)全日本仏教会
振替東京三七六〇〇番

的にかかわっていき、具体的行動を通じて、社会的影響力を持つにいたるまで、組織を拡充していくことを志向していません。

方策の一つとして、都道府県単位で、仏教青年会を結成することを大きな目標としています。

既に、香川県仏教が誕生し、現在、神奈川県、滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫の各府県では、設立の準備段階に入り、殊

日宗連理事長に鎌田憲英師



四月四日午後三時より東京・芝のソートービル会議室において日宗教連盟の



鎌田理事長

理事会、四時より参議会が開催され、任期満了に伴う本連盟の新役員が決定した。全日本仏教

会関係は次のとおりである。

- 理事長 鎌田憲英 (常務理事) 西 曹洞
- 監事 桜井大乗 (事務総長) 西 曹洞
- 参議 黒田白純 (理事) 西 曹洞
- 野村宗春 (常務理事) 西 浄土
- 麻布照海 (評議委員) 西 浄土
- 白川長純 (総務局長) 東 曹洞
- 岩脇宏信 (財務部長) 東 曹洞
- 小峰令丸 (組織部長) 東 曹洞
- 智山

全仏総務局人事

全仏事務総局では、長谷川組織局長の

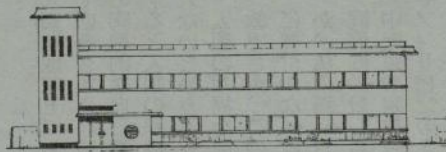
急近や職員退職に伴い、新人事は次の通りになった。

(新任)

組織局長	加藤海晃 (日蓮宗)	50・4・19
庶務部長	島田弘道 (曹洞宗)	50・4・1
文化書記	西尾貫之	50・4・1
国際書記	石川恒彦	50・4・1
(退職)		
組織局長	長谷川寿一	死亡 50・3・30
庶務部長	岩本英樹	50・3・31
文化主事	北山孝雄	50・3・31

実動の埼玉県佛教会

埼玉佛会館落慶で活発な教化活動



佛教会館の設計図

来る五月十五日午前十一時より、埼玉佛教会の宿願であった「埼玉佛会館」(浦和市高砂)の落慶式が執行される。同会館は埼玉佛教会の永年の夢であり、三年の歳月を経て立派に完成した。この間、建設資金などいろいろな難関に

ぶつかるなど紆余曲折があったが、役員一同の熱意がみのり、県内各寺院が一致協力するなど、天の時、地の利、人の和が会館完成の基となった。

この会館の完成にともない埼玉佛教会では、仏教講演会、仏教図書室、宗教講座などいろいろな教化活動のセンターとして、仏教運動を推進する。全日本佛教会では「実動する県仏」として期待している。

なお当日は落慶式典のあと、記念仏教大講演会(講師・東洋大学教授金岡秀友氏)を開くなど、早くも実動のスタートをきる。

埼玉県佛教青年会が発足

「埼玉佛会館」の竣工にともない、埼玉佛教青年会が結成されることになり、落慶式の五月十五日には発会式と創立総会が開かれる。同会は釈尊の精神を基に県内の青年が集い、お互いの研鑽をはかり、社会奉仕と教化育成につとめ、正法興隆に寄与することを目的として、積極的に前進態勢をとり、その第一歩を踏み出す。

県仏だより

神奈川県仏税務講習会 四月十九日(土)午後二時より横浜福祉センターで
神奈川県仏の税務講習会が行なわれた。
千葉県仏定期総会 四月二十三日(水)
成田山新勝寺光輪閣において千葉県仏定期総会が開催された。

時事点描

去る四月五日から三日間にわたって京都で開催された日本医学会総会では「生命への畏敬と医学の研究」をテーマとしてとりあげた。ところが皮肉にも医療被害者や人体実験に抗議を続けたきた若い医学者によって開会式が荒れ、特別講演・シンポジウム十一が中止された。四年前の同総会では「医学の進歩と医の倫理」をテーマとして討議されたが、明治

三十五年来続けて開催されているこの医学会総会は戦前はほとんど閉鎖された世界であった。ところが戦後、社会的関連の総会として、市民に開かれた場への脱皮が迫られてきた。

従来、医は仁術であるとされ、医学は人命を救う業として、市民は無条件でこれを信頼して来た。つまり医こそ生命尊重の第一人者として国民から信頼されてきたのである。ところがサリドマイド、スモン病、大腿四頭筋短縮症、あるいは未熟児網膜症、予防接種による各種の副作用など、いわゆる医療被害をはじめとして、臓器移植の問題、脳抹取などの人体実験が社会問題となり、医学者自身、医の本来的目

的に立ちかえって、いかにすれば患者の生命を救いえるかの反省となったようである。

先日テレビで榊原博士が数名の若者と語りあっている中で、一時間でも生命を延ばそうとするのが医者者の立場であるが、何例の中には臓器移植によって三年間も生存を続ける例もあるがだからといって現在の時点ですべての臓器移植の試みがよいとはいえないし、植物人間にして生存を続けさせることが良いか悪いかは色々と価値判断に議論のあるところだと語っていた

生命への畏敬と仏教

が、生命の畏敬という抽象的、哲学的な言葉も、さて現実的、具体的な問題となると極めて微妙である。

これもあるテレビ局が放映したドキュメントであるが、八十歳近い老夫婦が安楽死を強く求めている深刻な姿に人生の苦をひしひしと感ぜさせるものがあった。偉大な歴史学者であり、文明批評家ともいえるトインビーが来日したときの講演で、社会は世紀が進むにつれ、人間は非人間的となつていくと強調して二十一世紀には、人間はもはや人間でなくなるであろうと示唆していたことも覚えておこう。

先の安楽死志願や、医療被害、そして日々伝えられる残酷な生命軽視のできごともあることながら、われわれは人類そのものを滅亡にいたらしめようとする大規模な目に見えない魔力が押し進められていることも忘れてはならない。

最近までは、人類は地球上における生物の王者としてゆるぎなき自信をもってきたが、この陶酔的な自己讃美の詩が、ひよっとすると人類の悲惨な遭言となるかもしれないという不安が増大してきている。人類の幸福を願う宗教でさえ、このこと

に気付かないばかりか、仏教圏における同胞間の殺し合い、中近東の宗教戦争、北アイルランドやフィリピンのミンダナオに起っている宗教戦争など、果して宗教は生命を畏敬することを本旨とするものなのかどうかを疑わざるを得ない。

地球上に生をえるすべての生物は、地球の寿命を超えて生きながらえることはできないにしても、すべての生物は生きながらえるだけ生きようとしていく。人間はよりよく生き抜くために自然を克服するとともに、これから脱却するために生物としての一般的遺伝情報とは別に、第二の情報大系である文化、文明、産業社会へと発展の系列

を押し進めた。技術革新によって生産と経済は飛躍的に増進し、われわれの生活は大変便利なものとなった。しかしこうした科学技術が一方的に強大な力を得た結果、人間も他の生物も、逆に生命の危機にさらされはじめていく。核兵器の発見もその一つであろうし、工業の発展に伴う水・大気・大地汚染、即ち環境汚染もまたその一つである。しかし、それにも増して重大なことは、地球は有限であるということである。従って従来われわれが人生観、世界観として持ってきた無限の自然に生きるという考え方はなく「閉鎖世界」のなかで如何に人類全体が生きるべきかを基本的態度としなければならぬことである。そこで人口増大が問題となり、生長の限界が論議され、生命のコントロールが問題とされてくるわけである。

このように好むと好まざるとに拘わらず、もはやわれわれは閉鎖された世界に生きるより他はない現実のなかで、生命を畏敬すること、従来の宗教的、哲学的な考え方はなく、価値観の転換を図ってこれを確立しなければならぬ。宗教は、従って仏教はこの新しい価値観の確立のために自から脱皮しつつ役立ってゆかねばならないという強い要請に迫られているのではないだろうか。

(S・M)

宮本正尊博士著 『明治仏教の思 潮—井上円了の事績』を読んで

金 岡 秀 友

たのである。

現代日本におけるインド学、仏教学界の最高峰である宮本正尊博士が、昭和四十七年九月十六日、東洋大学の創立八十五周年を記念して東洋大学の学祖井上円了博士の生誕地、新潟県三島郡浦村の慈光寺に近い、長岡市北陸銀行大ホールにおいて「井上円了の思想と現代」と題する記念講演を行なわれてから、三年近い年月が経った。この講演会は、東洋大学の校友会の主催になるものであり、そのため、井上円了博士の事績を中心に講演がなされたのは当然であった。

しかし、井上円了の事績は、明治期における日本仏教界の動向の一つの決算であると共に、明治の日本の動勢そのものでもある。このため、井上博士を十全に理解するためには、仏教学の理解と明治期の把握において、井上博士を超える力柄の持ち主でなかったら不可能だったのである。

このことと同時に、井上博士に至る前井上のもろもろの仏教界の動向は、当然辿り来って井上に及ぶという形をとらなかつたならば、井上博士自身も、明治期の仏教も共に描きえない結果に終ること、もまた火を見るよりも明らかなことだっ

たのである。宮本博士がその最適任者の一人であることは当然であるとしても、右の縁縁がこの書を生む直接の動機になったことはまちがいない。そしてその時、右に考えられるような叙述上の要求が博士のうちに抱懐されていたことは、博士が「あとがき」において「『明治仏教の人物と思想』というような本を書いてみたいと思つたことは、確かにあった。それがこんど、それに近い表題の一書ができたので自分ながら不思議の思いである」と述べられていることから窺うことができ

る。本書はこの方針にそつて、明治維新の二つの思想的原点—維新と復古—が、不幸にも跋行的な復古の力点から歪んだ出発を見せはじめ、もつて敗戦にまで直結する日本ショーヴィニズムを形成したことを伏線に抑えつつ、その間にあって、仏教の開明的思想家たち、大谷光尊、島地黙雷、村上專精、原 坦山、井上哲次郎、井上円了等が開拓した本質的な宗教観や、東西思想の止揚等の事業に、正当な、そして高い評価を与えている。

それは、一部史家が井上円了博士を、「小井上」と捉え、単なる近代前期の啓蒙主義者とか、キリスト教に抵抗したドン・キホーテ的護教家などとのみ断じ去つていた皮相な見解に学的に下された一大痛棒といつてよい。今後の明治思想研究家は、本書を通らずしてそれを語ることはできないであらう。

本書の魅力は、割注の形で懇切に明示

インドシナ半島に平和を

仏教精神を生かそう

ベトナムとカンボジアの戦乱にある終結が近づいてきました。ここで両国の歴史に仏教の果たした役割をふりかえつて見たいと思います。

十三世紀にはアンコールワットに象徴される仏教文化の華を咲かせたカンボジアは、常に近隣の強国、タイとベトナムの侵攻に悩まされ、ついには一八六三年にフランスの保護領になってしまいました。

長老派仏教のこの王国が独立したのは一九五三年のことでしたが、その間、フランス文化の強い影響下で、カンボジアがその独自の文化を保全できたのは、町や村の仏教僧院での教育、教化を通じてであったとされています。

独立すると、当時の国王シアヌーク(後に元首)は仏教を国教とし、仏教的

された資料と共に、博士が見聞した数々の事績、事件の生き生きした話法にもある。それはマックス・ミュラー、フェノロサ、ビゲロー、ガンジー等の海外仏教者にも及び、若い読者にも無量の啓示を与えてくれるものである。願くは、博士によって、本書の続編として、大正・昭和期の仏教思潮についても御執筆頂きたいものである。(文化専門委員)

社会主義国家の建設を夢見ました。しかしながら、伝統的な敵であるタイとベトナムへの力の均衡を求めて、中国に接近したことが米国の誤解を招き、ロンノルのクーデターとなり、現在の戦乱となつたわけです。この戦乱のなかで、仏教徒がその解決に向かってどんな役割を果たしているのか、外部からはうかがい知れません。

カンボジアが他国からの侵略にさらされつつも、長老派仏教一本にまともな来たのに対し、ベトナムは、その紀元前からの歴史にもかかわらず、外国に隷屬している期間が長く、その強い文化的影響をまぬがれ得ませんでした。現在、中国経由で入った純粹の大乗仏教を信じているものは約二〇%、フランスからのカソリック教徒が一二%、ベトナム独自の新興宗教力オダイやホアハオを信じるものが少々で、あとは道教、儒教、仏教の混合

した儀礼を行っているといわれます。

仏教徒は一九五四年の南北分割に至る解放闘争にベトナムの一員として積極的に働き、分割後は大部分は南ベトナムに移って、カトリック優遇のゴ・ジンジェム政権を一九六三年に倒すのに大きな働きをしました。しかしゴ・ジンジェムにかわった軍事政権は必ずしも仏教徒を満足させるものではありませんでした。そこで、今日に至るまで各種の軍政への示威あるいは反対運動が試みられましたがいずれも成功を見ぬうちに、南ベトナム軍事政権が解放勢力によって大敗北をこうむる今度の事態になったわけです。

ベトナムの仏教徒が、その歴史の転回期に多くの役割を果し、かつ果そうとしてきたのに、その努力がベトナムの政策にほとんど反映されなかったのは、表面的には南北分割にともなう、大國の利益

の確執が、解放戦線と軍事政権の対立を生み、仏教徒の声など吹き消されてしまったといえるでしょう。しかし、もっと深いところには、永く僧院のなかにあって、伝統的教育を受けてきた仏教徒に、現代の複雑で進歩した社会に対応できる知識、能力、政策、そして組織、人材に欠けるものがあつたのではないのでしょうか。

カンボジアの仏教社会主義にも同様の点が多かつたといえましよう。日本の仏教徒には他山の石となるのですが、何よりも、ベトナム、カンボジアの仏教徒が仏教の本来もつ、平和で建設的な精神を現在のインドシナ半島の困難に生かす道を一日も早くさがし出し、而國の真の平和と繁榮に貢献することを祈って止みませぬ。

(文責・国際局)

バンングラ孤児への救援寄金

4月18日現在

◎全日仏加盟団体および関係寺院団体よりの寄金

合計 二百三十九万九千三百九十五円也
(内 訳)
二十万 全日本仏教会(東京) 高野山真言宗(和歌山) 埼玉真仏教会(第一回) 十四万円

千葉県仏教会 十万四千六百四十五円

摂護寺(宮崎) 十万円

和宗(大阪) 浄土宗(京都) 聖観音宗(東京) 日蓮宗(東京) 真言宗豊山派(京都) 真言宗智山派(東京) 浄土真宗本願寺派安芸教区南組 仏婦連盟(広島) 仁和寺(京都) 六万六千円

全日本仏教婦人連盟(東京) 五万円

東京仏教青年会 栃木県仏教会 融通念仏宗(大阪) 国柱会(東京) 東京ブライストクラブチャリティショー 四万七千二百円

天台宗関信協年次大会 三万円

鹿苑寺(京都) 精華女子高校(福岡) 泉涌寺(京都) 新勝寺(千葉) 二万円

本門仏立宗(京都) 西光寺(兵庫) 大谷学園(大阪) 宮崎報恩会 一万七千五百八十円

寒松院松友会(東京) 一万七千七百円

天台宗埼玉教区布教師会 一万三千元

妙光寺ひかり幼稚園(宮城) 一万円

高尾山薬王院(東京) 臨濟宗南禅寺派(京都) 五千円

昌宏庵青年部(京都) 永岩寺(秋田) 四千五百二十円

地福寺(埼玉) 三千三百五十円

金剛院(東京) 三千元

千手院(埼玉) 大徳寺(京都) 二千元

◎一般協力者よりの寄金

合計 百二十八万三千七百三十六円也

総計 三百六十八万三千三百一十円也

全日本仏教会

哀悼

長谷川組織局長急逝

本葬・五月十六日午後二時

長谷川寿一全仏組織局長は三月三十日腦溢血のため急逝、四十五歳。本葬は五月十六日二時より自坊の妙頭寺(台東区池ノ端二の四の十九)で執行される。全仏では、昭和四十九年二月局長に就任され、全仏組織強化にあたり、とくに新生の全日本仏教青年会発足に尽力されるなど精力的で幅広い活動をされた。全日本仏教会はもとより、日蓮宗においても宗会議員として活躍、対社会的にもPTA会長をつとめるなど、その浄化は惜しまれる。

事務総局録事(四月)

- 一日 長谷川組織局長密葬参列
- 三日 全仏誌編集会議
- 四日 日宗連理事會・参議會
- 九日 局内會議
- 十九日 局内會議
- 二十一日 神奈川県仏税務講習會出席
- 二十三日 文化會議運営委員會(関東)
- 二十八日 文化會議運営委員會(関西)
- 監査會(昭和四十九年度歳入歳出決算)
- 局内會議

昭和五十年五月一日発行
五月号 第二〇七号

発行人 板井大乗
編集人 清胤徹昭

発行所 財団法人

全日本仏教会

東京都台東区西馬場一ノ五(東京本願寺内)
電話〇三(八四三)六三、四一、三